

Argentina

アルヘンティーナ

No. 66



ブエルト・マデロ、ブエノスアイレス (2012年11月撮影、水上前駐亜日本大使ご提供)

一般社団法人 日本アルゼンチン協会 会報

2015年7月

新旧理事長挨拶

- 副会長 木島 輝夫 (前理事長) 2
- 新理事長 永井 慎也 2

我々の時代に関する一考察

- (フェリペ A. ガルデラ公使) 3

アルゼンチン駐在を振り返って (鈴木 将仁) 6

アルゼンチンタンゴ

- ーダンス文化と日本のタンゴの未来
(山尾 洋史) 7

アルゼンチン政治経済短信 (荒尾 保一) 8

Resumen en castellano (Irene Gashu) 11

協会の活動案内

- ～ 10月16日 (金)
当協会主催第28回「タンゴ音楽の集い」..... 12
- ～ 10月18日 (日)
アルゼンチンタンゴ・コンサート in 湯河原 ... 12

協会の活動報告

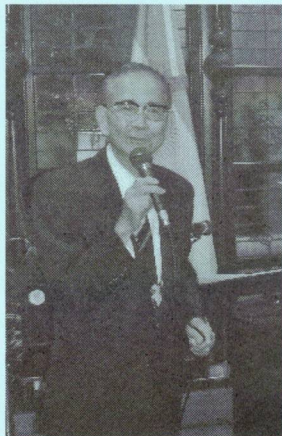
- ～ 1月22日 (木)
茨城県境町、長田小学校関係者表敬 12
- ～ 1月23日 (金) デジャン大使に新年表敬 12
- ～ 3月11日 (水) 平成26年度第2回理事会 13
- ～ 3月20日 (金)
第26回「タンゴ音楽の集い」..... 13
- ～ 5月26日 (火)
アルゼンチン・ナショナル・デイ
記念レセプション 13
- ～ 5月29日 (金)
平成27年度第1回理事会
第3回定時総会、第2回理事会 13
- ～ 6月11日 (木)
在アルゼンチン新日本大使と昼食懇談会 14
- ～ 6月19日 (金)
第27回「タンゴ音楽の集い」..... 15

トピックス

- ～当協会 日本アルゼンチン文化大使誕生 15

ご挨拶—協会の更なる発展に向けて

副会長 木島 輝夫



2004年から11年間にわたり理事長の職を務めさせていただきました。

アルゼンチンやその文化を心から愛し、また日本とアルゼンチン両国間の関係の大切さを信じてその増進のために時間と労力を惜しまない多くの会員や役員とともに、心を通わせながら働くことが出来たことは本当に幸せでした。

貧しい財政の中で、知恵を出しあい、皆で汗をかくという運営に心がけてきましたが、この11年でなんとかその基礎固めが出来たのかもしれないと感じております。ボランティアながら献身的に仕事を分担して頂ける方々が「拡大常務理事会」なる事実上の組織を編成して結集し、そのメンバーが力を合わせてほとんどすべての案件を決定・実行することに致しました。特殊法人法改正で一般社団法人になってからは「業務執行委員会」と称しています。

今後は私は副会長として新理事長を盛り立てることに専念しつつ、協会の発展のために微力を尽したいと思っております。

ご挨拶—新理事長就任に当たり

新理事長 永井 慎也



5月29日(金)第3回定時総会に引き続く理事会に於いて、理事長に選任されました永井慎也でございます。私は、2003年から2008年まで、アルゼンチン駐在日本国大使を勤めました。この経験を活用し、少しでも当協会及び皆様方のお役に立てれば良いかと考えていま

す。

アルゼンチンは、南米における大国であります。日本にとっても、南米および世界での今後の外交を展開する上で欠くことのできない国であります。また、ヨーロッパの歴史、文化を継承し、さらに独自の発展を遂

げつつある有力な国であります。日本も明治維新以来、欧米の発展を手本に近代化を遂げましたが、独自の歴史、文化を維持しています。また、経済でも、アルゼンチンは一次産品、日本は工業製品の生産を基本としており、相互補完関係にあります。

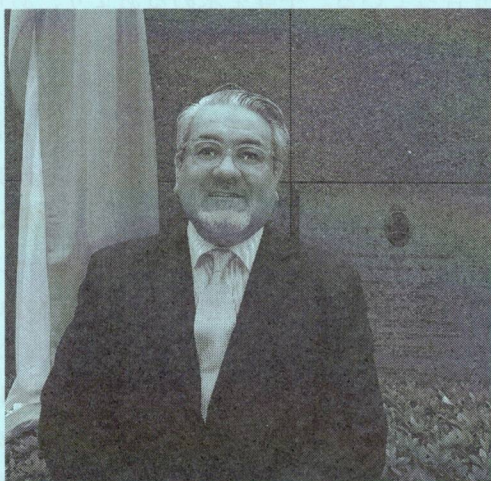
しかし、このような関係は、人と人の細やかな関係なくしては維持させ、発展させることは殆ど不可能であります。当協会の役割があるとなれば、この人と人の細やかな関係の維持、発展に寄与することにあると思っています。そして、この点において、当協会は、これまでの会員の皆様のご活躍、ご貢献により既に大きな成果を上げてきています。

私としましては、微力ではございますが、皆様方のお力を得つつ、なんとか職責を果たすことを願っております。よろしくお願い申し上げます。

(参考訳文)

我々の時代に関する一考察

フェリペ A. ガルデラ



はじめに：モダニズム vs ポストモダニズム

歴史を振り返ってみると、どの時代も、その時代に即した世界観を生み出してきた。モダニズムは、思想史の立場からは進歩的な「啓蒙」の時代と定義することができるが、それ以前は、自然主義的な見方が一般的で、歴史は循環すると考えられていた。モダニズムにおいて、進歩とは発展的な前進を意味する。アダム・スミスやマルクスはモダニズムを進歩と同義語であると唱え、多くの思想家が論理実証主義に基づきその考え方に従った。

一方、ポストモダニズムは、理性の危機の時代であり、社会的伝統が崩壊し、社会に対する主体的関与を放棄した自己陶醉型の個人が台頭する時代と定義される。自己中心的な個人は、世界を自分に有利に動かす力や理性を持ち合わせているが、知ること自体を不可能だと考え、現実に行動を起こすことなく、歴史に貢献することもない。罪の意識や羞恥心を感じることなく、日々の生活を謳歌している。ポストモダニズムの快樂主義は、あらゆる人を対象としている。

実証主義者は、モダニズムのアイデンティティを単一性、不可欠性、同質性の概念から出発したと分析している。一方、ポストモダニズムのアイデンティティは流動的かつ相対的であり、刻々と形を変容させる現在進行形のプロジェクトである。故に、そこには普遍的本質は存在しない。

普遍的で一義的な知識を現実と結び付けようとしたモダニズムの試みは、ポストモダニズムの懷疑主義の

前に威信を失った。多様性、自立性を主張する声ばかり、普遍だと考えられていたモダニズムに対し、歴史を超えた倫理的モデルの押し付けではないかとの疑問が呈された。

ポストモダニズムの時代においては、イデオロギー、経済、科学技術などの分野でそれまで確かだと思われていた考え方が崩壊し、確かさより危うさが見て取れる。カオスと秩序の二元性がより顕在化し、もはや我々がモダニズムの時代に指針とした善悪、美醜、真偽といった価値判断に頼ることはできない。今日ではポストモダニズム的な「見るレンズによって、どんな色にもなりうる」との考え方が支配的である。

現在、我々が直面している問題は以下の通りである。

- ・メディアによる即物的な情報の氾濫と、伝統的な民主主義の弱体化
- ・消費者に変貌した市民たち
- ・グローバリゼーションの拡大により、世界規模の価値観を突きつけられた人々の間に広がる不安と戸惑い
- ・社会的コンセンサスが、実は一部の人々によって形成されているとの疑いが蔓延し、人々が無責任な方向に流れていること
- ・メッセージが氾濫する SNS
- ・「進歩は悪である」と考えて、進歩そのものを拒否し、歴史解釈の再検討が行われること
- ・言語そのものの正当性の喪失

個人：モダニズムの苦悩とポストモダンの不安

モダニズムにおいて個人は、自律的に自らが立てた目標に向かって行動する堅固で永続的なアイデンティティを持った存在であった。一方、ポストモダンにおける個人は流動的で多様なアイデンティティを持ち、理想と現実の狭間で超えられない壁を感じながら、断片的な経験のなかで生きることに慣れている。

今日の柔らかな時代には、宗教、民族、文化的な価値観を頼りに、人々が再び安定を求める傾向が見受けられる。個人の帰属が再び問われる時代に我々は遭遇している。

モダニズムの特徴が「苦悩」であるのに対し、快樂

主義的な個人が台頭するポストモダンの特徴は、「不安」である。「苦悩」は近代人を不安、警戒、心配へと駆り立てる。生きることは永遠ではなく、儂いものであることを意識せざるを得なくなるが、近代人の自我は苦悩することで目覚め、人間としての幅が生まれる。近代の多くの思想家にとって、「苦悩」は哲学の原動力であったといえよう。

一方、ポストモダンの特徴である「不安」は、将来に向かって改善される見込みのない状況の中で生きていくことへの不安や、今の状況から一刻も早く脱却したいと願う現状に対する不満である。焦燥感、現状への不満、先の見えない状況が不安を引き起こす。人々は事前に計画を立てることなく、ものごとを切望し、その場その場で対処する。旅行の計画、健康問題、将来設計などにおいても同様に対処する。今日では、不安によるノイローゼがパニックを引き起こすことは、珍しいことではない。

「苦悩」が自己実現と関係しているのに対し、「不安」はこの世のはかなさと関係している。ポストモダニズムの個人は、目の前の現実具体的にどう対処するかではなく、漠然とした将来に対して憂慮する。

ポストモダニズム：消費主義、政治

ポストモダニズムにおいては、真実の言葉はひとつではなく、全ての言葉が有効性を持つ。全ての真実は、解釈次第である。メタファーと語義の境目は曖昧となり、言葉と真実の一致が見られなくなる。国家、進歩、祖国、家族、革命などモダニズムの象徴とも言うべき偉大な概念はこうした時代の推移に伴い失墜し、文化の多様性、差異性が尊重されるようになった。そして同時に、倫理観よりも美的価値に重きが置かれるようになった。

今日、モダニズムの根幹は弱体化し、社会を侵食するメディアの前に、世界はメタファーと化している。全てがお金に換算される世の中では、国民国家どころか、人類という概念すら色褪せてしまった。

民主主義の枠組みの中で、政治体制がメディアの駆り立てる欲望のリズムに追いついていないことは明白である。社会的・文化的視点から見ると、我々が生きている社会は、今を優先させるあまり、時間の価値を省みなくなってしまった。個人主義的で、非連帯的なこの時代を一言で表すのであれば、“何が欲しいか分からないけれど、とにかくすぐに欲しい”という言葉がふさわしいだろう。現代人の抱える不安と消費主義を体現する言葉だ。

メディア産業は大衆を駆り立て、即決、即答を政治に求めるが、現行の政治体制では対応しきれていない。

物理的限界と切迫した要求の狭間で緊張は高まり、時に対立へと発展する。

現代の情報産業は自らアイデアを生み出し、提言を行い、政治家や知識人と同じ土俵で競いあう。しかし、このような状況を“文化的民主化”と呼ぶのは誤りである。企業広告も同様に、アーティストと同じ土俵で張り合っている。平等を求めるあまり、あらゆる分野でヒエラルキーや業績がおろそかにされている。

人々の焦燥感を煽る今日の快樂的な文化は、メディアや企業の戦略どおり人々が受身でいることを良しとする。マスメディアは、外界で起こった残虐な出来事をあたかもアクション映画のように仕立て、家庭にまで持ちこんでくる。人々は世界の恐ろしいニュースを聞いて心配するが、その態度は傍観者の域を出ない。むしろ、自分の目に映る快樂的な現実と比較し、ニュースを娯楽として楽しんでいる。そこには自律的に人生と対峙し、自分自身と向き合う姿はなく、欲望の対象となるショーウィンドウに目を向ける姿があるだけだ。

むすび

我々の危惧は、政治の失墜、国家の形骸化を受け、個人が市場の企みにさらされることである。メディアと消費文化の相乗効果によって、食欲、ファンタジー、娯楽など人々が欲しいと思うものが次々と生み出され、欲望を掻き立て、現実逃避に対する大衆の罪悪感をもかき消してしまう。

エンターテイメント、消費主義、観光客の視点は、ポストモダニズムの都市の様相を理解するキーワードである。「私中心」のポストモダニズム的個人主義では、欲しいものを手に入れることが全てで、その生活スタイルは表面的なものである。消費文化は、誰に対してもオープンだが、全てが際限なく消費されていく。意味、真実、知識でさえも、その例外ではない。

エルゲン・ハーバーマース（ドイツ）、アラン・トゥレーヌ（フランス）、アンソニー・ギデンズ（英国）、フレデリック・ジェイムソン（北米）、マリオ・ブング（アルゼンチン）、カルロス・フエンテス（メキシコ）等の思慮深い批評家達は、現代の状況を“ポストモダニズム的祝宴”と評し、その浅薄さを批判している。倫理の低下、社会の崩壊が進む一方で、増大するマスメディアが作り出す現実の前で、人々は一時たりとも気が休まらず、指針となる拠りどころを切望している。精神性を高めたり、自己陶醉型の快樂主義に対抗する社会的連帯を強化したり、政治不信を払拭し、民主主義を再確認する指針が求められている。

ここまでポストモダニズムについて批判的に論じて

きたが、20世紀はふたつの世界大戦があった時代であり、人類史上最も血なまぐさい世紀であった事実を考えると、モダニズムにも欠陥があることは否めない。一方、ポストモダニズムの時代になると、多様性、差異性が認められ、価値の歴史的・文化的背景、科学的論拠が考慮されるようになったことは評価されるべきである。“何でもアリ”という価値観や人々に無力感をもたらすニヒリズムの蔓延を阻止し、個人が自分自身を取り戻し、公正な社会、安全な世界秩序が実現されるために、ポジティブかつ体系的に行動することが求められている。ローカルかつグローバルな複眼的思考、社会問題に対する主体的な関与、倫理観を伴う政治の実現、社会科学と自然科学の融合、知性を伴う芸術の創造を通して、調和が生まれ、新しい時代が築かれていくのだ。

最後に、1941年に出版されたエーリッヒ・フロムの「自由からの逃走」からの一節を引用し、結びとしたい。我々が未だ多くを学んでいないことを示唆する文章である。

「人間が社会を支配し、経済機構を人間の幸福の目的に従属させるときにのみ、また人間が積極的に社会過程に参加するときのみに、人間は現在かれを絶望----孤独と無力感----にかりたてているものを克服することができる。(……) デモクラシーは、人間精神のなしうる、一つの最強の信念、生命と心理とまた個人的自我の積極的な自発的な実現としての自由にたいする信念を、ひとびとにしみこませることができるときに

のみ、ニヒリズムの力に打ち勝つことができるであろう。」(日高六郎訳『自由からの逃走(新版)』)*1

(フェリペ A. ガルデラ：
在日アルゼンチン共和国大使館公使)

註：原案(スペイン語文)は、別刷して本会報に折り込んであります。

脚注*1

エーリッヒ・フロム著「自由からの逃走」
出版社 Paidós (バルセロナ) 1987年

出典：フェリペ A. ガルデラ著
『柔らかな時代：ポストモダニズムにおける個人、社会、そして世界秩序』、
2004年 ベルー リマ マヨール デ サン マルコス 大学出版会基金より出版

Felipe A. Gardella 公使 略歴

専門： 外交官 エコノミスト
1956年 プエノスアイレス生まれ
1982年 外務省入省
1987～1991 在メキシコ アルゼンチン大使館
(二等書記官)
1994～2000 本国 経済・公共事業大臣付秘書
2002～2007 リマ総領事館 総領事
2011～2014 上海総領事館 主席公使
2014年8月 在日アルゼンチン大使館、主席公使



アルゼンチン駐在を振り返って

鈴木 将仁

アルゼンチンに関する寄稿の機会頂いたことに感謝申し上げますと共に、同国に関する高い見識及び豊富な経験をお持ちの皆様ゆえ、読むに堪えない内容である可能性高いこと最初にお詫びさせていただきます。

当方のアルゼンチン駐在は日本でのサッカーワールドカップにて同国代表が予選グループ敗退した翌日から（途中3年程の空白等を含み）昨年初まで8年強、ブラジル以外の南米各国も担当国に勤務しておりました。アルゼンチンについては地球温暖化による影響が当方業務的には天候不順続く毎日でしたが、そもそも南米関連の最初の仕事が20年ほど前のブラジルを含む南米各国向けパルクラブ・リスクという事もあり、個人的には豊かな稲穂実る前の長雨と楽観的に捉えておりました（しかし、赴任2年後にストレス性味覚障害になりましたが・・・）。

現地では南米各国への出張機会多く、域内に於ける相対的なアルゼンチンの豊かさを実感すること多かったことから、今回はそれらにつき幾つか記させて頂きたく暫くお付き合い頂ければ幸いです。

1. インフラ

現地生活ではモグラ叩きの如く発生するインフラ老朽化問題に囚らずとも直面する機会が何度かありましたが、その度ごとに極めて前向きに“過去より幅広くインフラ基盤が整備されたことの証”と自身を説得(?)しておりました。実際、鉄道の総延長距離は南米域内最大、その5割近くが19世紀末までに敷設された事を踏まえれば、一般的な新興国におけるインフラ環境とアルゼンチンのそれとは大きく異なるのかもしれませんが。

インフラ能力強化についてはアルゼンチンに加え（柔軟な資金調達可能な）他の南米各国でも優先課題との理解でしたが、“①事業実施におけるリスク負担（含む資金負担）”、“②需要地とのリンケージ”、“③環境対策”等が支障となり、具体化が遅々と進まない事例を多く見てきました。特に鉄道事業においては最もコスト要するレール建設（含む用地取得）を巡り入札が成立しないケース多く、その意味ではアルゼンチンの広大な既往線路網は大きな財産。加えて、アルゼン

チンでは過去10年超の需要が蓄積され、現在計画されている大型インフラ事業の多くが域内他国と異なり政府主体（事業リスクの多くを政府が負担）を基本に計画されていること踏まえるに、金融環境が整えば具体化に向けたスピードは予想外に速いかと思われます。

2. 人材

当方が人材につき言及することは極めて僭越と承知しつつも、駐在中に実感したのが優秀な技術者の多さでした。これも域内対比となりますが、他国でのインフラ事業等に関する現地関係先との協議では欧米系技術者を対象とする事多かったのに対して、アルゼンチンでは自国技術者がメイン、加えてその応答も極めて質高く、当方側技術コンサルが驚くのが常でした。実際、域内他国に出張するたびに理系人材の不足を頻繁に伺っていたこともあり、以前、ベネズエラでの事業にて一緒にした国際機関の技術系職員から聞かされたアルゼンチンにおける理系高等教育機関の質の高さを実感した次第です。

昨今、南米域内への中国進出が活発なもの、アルゼンチンでは特に技術オリエンテッドなセクターでの存在感が今一つ低いとの印象を持っておりましたが、かかる要因の一つが技術に対する評価能力の高さなのかもしれません。

3. 最後に

まだ幾つかあるのですが頁が限られていることもあり、最後に駐在中の当方エネルギーにつき一言記させていただきます。と言っても、“ステーキ&ワイン”には全く及びませんが・・・。

駐在中はリーマンショックやギリシャ危機等もあり、アルゼンチンに関する問い合わせも否定的なものがメインでしたが、当方回答にて常に最後に付言していたのが、金融環境に伴う資金調達手段の制限が“結果的”にもたらしたプラスの側面でした。

具体的には、既に記させて頂いたインフラ関連需要や資源開発機会の蓄積に加え、政府では対GDP比での低い公的債務、幾つかの現地企業では低レバレッジによる財務体質強化が“結果的”に実現されました。

今思い返せば、かかる事実の発掘及び萌芽に対する

期待が現地業務における当方エナジーであり、公的債務を対象としたパリクラブが合意された現状等踏まえれば、かかる期待の具体化も近いと確信している次第です。

G20の経済規模、優秀な人材、豊富な資源、更には過去より蓄積されたインフラ基盤等を土壤に10年超続

いた長雨も栄養とした逞しい果実から新たなエナジー得られることを楽しみにしつつ拙文を終わりとさせていただきます。

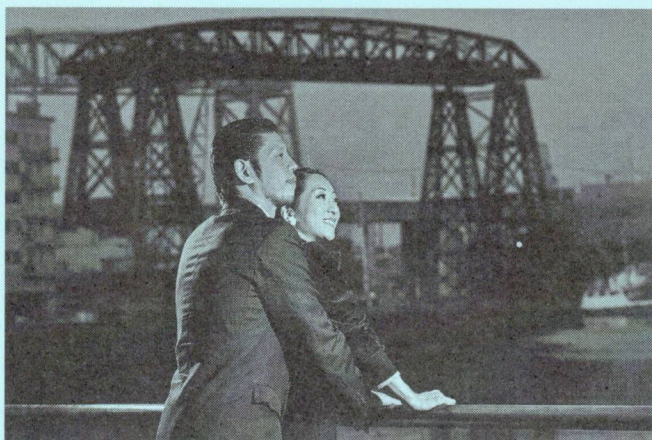
(すずき まさひと：
国際協力銀行 元アルゼンチン首席駐在)

アルゼンチンタンゴ

—ダンス文化と日本のタンゴの未来—

山尾 洋史

私はアルゼンチンタンゴのダンスを生業としている。現在44歳、以前は自動車電装部品メーカーのサラリーマンであった。29歳でタンゴに出会い、瞬く間にその魅力の虜に。もっと知りたい!もっと踊れるようになりたい!と35歳で会社を辞め、パートナーである妻と共にアルゼンチンへ渡った。当時はプロフェッショナルになるために渡垂したわけではなく、単に己の可能性を追求しただけであった。約1年半、ブエノスアイレス生活の中で触れた本場のタンゴ文化、そしてそれに関わる多くの方々にとくさんの愛情を注いでいただいたことにより、単に己のダンススキルの向上だけでなく、この文化を正しく日本に伝えなければと考えるようになり、プロフェッショナルになる決意をし、今日に至っている。



ボカの港で、タンゴ発祥に想いを巡らして

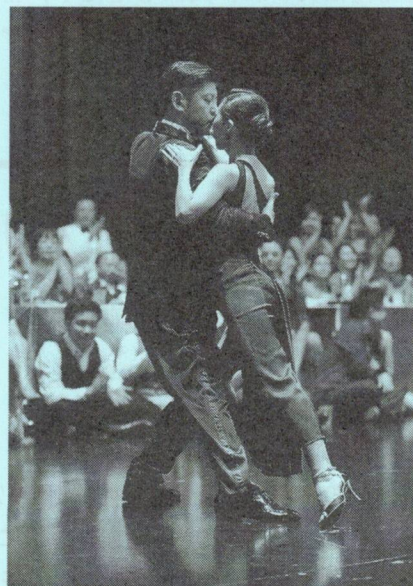
私の生業であるタンゴダンスはプロフェッショナルとして行う仕事に主に2つの柱で成り立っている。

第1に、言うまでもなく「踊ること」つまりダンサーである。自分自身が舞台やエキジビションで踊ること、つまりタンゴを表現し人様にタンゴの魅力を伝えることである。

第2に、一般の方にもアルゼンチンタンゴダンスを楽しんでいただけるよう「教授すること」つまり教師である。

ダンサーとして観衆に魅力的なタンゴを伝えるには、単にフィジカル面でのスキルアップを図るだけでは成り立たない。タンゴという文化背景をダンスに織り込み、異国の香りを漂わせなければ観衆には伝わらないのである。10年ジャズダンスを踊っていても20年バレエを踊っていても、文化を無視した人にはタンゴを踊る事が出来ない。それがアルゼンチン人であっても同様だ。逆にその部分に敬意を表することが出来れば、30代からでも40代からでも、そして外国人であってもタンゴのプロフェッショナルになれる可能性が大いにある。そこがタンゴの面白いところである。

もう一つの柱である「教師」としての力量も、同じく文化に精通していないと成り立たない。タンゴを踊



タンゴ文化を踊りに織り込んで

る場所を「ミロンガ」と呼ぶのだが、一般のタンゴダンス愛好家はそこでダンスを嗜む。誰もが気軽に遊びに行く事の出来る場所として存在しているミロンガ、実は相当シビアなヒエラルキーの社会である。

タンゴダンスは自分のパートナーと踊るだけではなく、見知らぬ人同士で踊ることもある。いわゆる「誘い誘われ」の遊びだ。そんな性質を持っているが故、遊び場ではソーシャルなセンスが求められる。一般の愛好家がミロンガを訪れる際、自分が楽しめる可能性を最大限にするため、さまざまな用意をする。相手に良い印象を与えられるよう、身なりを整え清潔感を醸し出す人や、魅力的な服装を身に纏う人、相手を飽きさせないために話術を磨く人や、タンゴ音楽の事など知識を磨く人。もちろんダンスに磨きをかける人は最大の可能性を手に入れる。

そして自然に人気者とその他の存在でピラミッドが形成されていく。人気者は男女問わずいつでも踊る機会に恵まれ、そうでないものは時々待ちぼうけをくってしまう。タンゴダンスにハマった者は色々な武器を携え、ミロンガという厳しい階級社会を生き抜いていかなければならない。そしてその手助けをするのが教師の役目なのである。

しかし残念ながら日本は、本格的に走り出した80年代のタンゴダンス創成期から社交ダンスでお馴染みの「リボンシステム」を採用(お客様のダンスのお相手をするホスト・ホステス業)してしまった。本来の文化を鑑みず、安易に人口を増やそうとしてしまったことで、重大な間違いを犯してしまった。共通の趣味で友人を作り、楽しく余暇を過ごすという側面ももちろんあるが、本来「誘い誘われ」のスリルが大きな楽しみと活力源の1つでもあるアルゼンチンタンゴダンスなのにその自発性は失われ、人口も増えず、結果タンゴレベルもなかなか向上しないというジレンマに陥っている。



シンガポール・フェスティバルの風景

立場上、仕事でアジア諸国を訪れる機会があるが、他の国は比較的タンゴダンス文化の年月が浅いせいか、文化の吸収に対し非常に興味を持ち、それを尊重・実践しタンゴを楽しんでいる。参加者個人の意識も高く若年層がどんどん増えていて、日本では考えられないほど成長が早い。

長い歴史を持ちながら周辺諸国に追い抜かされた感のある日本のタンゴダンス界の掘り返しを図るため、私は去年から発足した「一般社団法人日本アルゼンチンタンゴ連盟」に副会長として参加し、日本のタンゴダンス界に正しい文化が浸透し、より多くの人々がタンゴに触れられることの出来るような拡大と発展に取り組んでいる。

中身の無いビジネスに走らない環境を、そして未来に正しい文化の継承を。アルゼンチンタンゴダンスがいつまでも魅力的であるよう日本のアルゼンチンタンゴファン一人一人に語りかけていきたい。

(やまお ひろし：2009年度アルゼンチンタンゴ世界選手権 世界チャンピオン)

選挙期を迎えたアルゼンチン

— 亜国政治経済短信 —

1. 大統領選挙近づく

アルゼンチンの大統領選挙は、本年10月25日に本選挙が行われる。その前に、6月10日までに政党及び政党連合の登録が行われ、8月9日には、予備選挙が行われる。

荒尾 保一

本選挙において、第1位の候補者が投票総数の45%以上の得票を確保するか、あるいは40%以上の得票で第2位の候補者との間で10%を超える差を付けた場合は、1回だけの本選挙で大統領の選出が確定されるが、そうでない場合は、第1位と第2位の候補者の間で、

決選投票が行われる。この決選投票は、11月24日までに行われることとなっている。

周知のとおり、フェルナンデス大統領の2期目の任期は、本年12月で満了する。

憲法の規定により、大統領の3選は禁止されているので、今回の選挙は新人の候補者によって争われることとなる。

現在出馬が予定されている有力候補者は、次の方々である。

シオリ	ブエノスアイレス州知事
	ペロン党現政権派 勝利のための戦線 故キルチネル大統領当時の副大統領
マサ	下院議員 ペロン党反現政権派 刷新連盟 元ティグレ市長
マクリ	ブエノスアイレス市長 野党 共和国提案 実業家でボカジュニアのオーナー
ビーネル	下院議員 UNEN拡大戦線

昨年9月の世論調査では、マサ下院議員とシオリ知事が拮抗し、マクリ市長がこれを追うという形であった。

2月に行われたポリアルキア社による世論調査の調査結果は次のお通りであった。

マクリ	ブエノスアイレス市長	28%
シオリ	ブエノスアイレス州知事	27%
マサ	下院議員	24%

その後、本年3月、野党急進党の党大会において、サンス急進党党首の提案により、急進党、共和国提案（代表マクリ市長）及び市民連合（代表カリオー下院議員）の3野党の選挙連合方針が賛成多数で採択され、ここに野党連合が形成された。また、4月には、マサ下院議員とデ、ラッタ、コロドバ州知事（ペロン党反政権派）との間で、8月の予備選挙に向けて「新たなアルゼンチンのための連合」が形成された。

しかしながら、これらの構想は同床異夢のもので、6月に至り、サンス党首は、3野党の選挙連合を否定した。また、マクリ候補とマサ候補の提携案も実現しなかった。

4月19日付のラ ナシオン紙は、ポリアルキア コンサルタント社が行った世論調査の結果を次の通り報じている。

シオリ	ブエノスアイレス州知事	33,4%
マクリ	ブエノスアイレス市長	27,3%
マサ	下院議員	20,1%
ストルビセル	下院議員（野党 GEN）	6,4%
アルタミラ	労働党書記	2,3%

他方、ブエノスアイレス市では、7月5日に市長選挙が行われることとなっており、4月26日に予備選挙が行われた。この結果は、マクリ市長が推すロドリゲスラレタ同市官房長官（共和国提案）が最多得票を得た。このほかには、ルストー下院議員（組織市民エネルギーECO）、レカルデアルゼンチン航空CEO（ペロン党勝利のための戦線）等が本選挙に出馬する。

この他、サルタ州、サンタフェ州、メンドサ州などで知事選挙が本年行われることとなっており、アルゼンチンは今年選挙の時期を迎える。

2. フェルナンデス大統領の訪中、訪露

(1) 訪中

本年2月2日～5日にかけて、フェルナンデス大統領は、中国を訪問し、習近平中国国家主席と会談し、また同主席主催の昼食会に出席した。また、大統領に同行したティメルマン外相、カサ ミケラ農牧・漁業相、デビード公共事業相は、それぞれの中国側カウンターパートと会談した。



この訪中において、亜中両国は、二国間戦略的統合委員会強化、査証、通信、原子力、宇宙、鉱業分野等における協力促進に向けた22件の合意文書に署名した。

主要な案件は次の通りである。

(イ) サンタクルス州ダム建設プロジェクト

2基のダム建設 融資総額47億米ドル

(ロ) 原子力発電所建設プロジェクト

アルゼンチンにおける4基目の発電所建設

(ハ) アルゼンチン ナシオン銀行の北京支店開設

(2) 訪露

フェルナンデス大統領は、4月21日～23日にかけてロシアを訪問し、プーチン大統領と首脳会談を行った。この機会に20件の宣言や合意文書への署名が行われた。また、企業家フォーラムが開催されるとともに、ロシア ガスプロム社との会合も開かれた。

3. フェルナンデス大統領等のイラン密約事件

本年1月、アルベルト ニスマン連邦検事は、1994年に起きたユダヤ系施設への爆弾テロ事件に関し、フェルナンデス大統領やティルマン外務大臣等がこの事件の逃亡中のイラン人容疑者を処罰しない代わりに、アルゼンチンからの穀物や肉の輸出とイランからの石油の輸入とを約する密約をイラン政府との間で結んでいた疑いで、同大統領等の捜査を行うとの許可を裁判所に求めた。ニスマン検事は、通信傍受等で得た情報を基に反論不可能な証拠があるとして、300ページに及ぶ報告書を裁判所に提出した。

このテロ事件は、1994年7月にブエノスアイレスにあるユダヤ人共済会ビルが爆破され、ユダヤ人85人が死亡し、約300人が負傷した事件である。裁判所は、この事件は、レバノンに本拠を置くシーア派民兵組織ヒズボラによる犯行で、イラン政府の元閣僚も関与していると認定していた。

ところが、このニスマン検事が、議会で証言することが決まっていた日（1月18日）の前日に、自宅の風呂場で死亡しているのが発見された。顛顛に銃創があったといわれる。この事件の捜査担当者は、ニスマン検事は自殺とみられるとしながらも、殺害され、あるいは自殺させられた可能性を排除できないと述べた。

フェルナンデス大統領は、自らのフェイスブックで、ニスマン氏は政権が密約に係ったかのように見せかける陰謀に巻き込まれ、利用されたのちに、政府をスキャンダルに陥れるために殺されたと主張した。

このニスマン検事死亡事件後、市民の間に密約疑惑や死亡事件の真相解明を求めて、ブエノスアイレスで、2月、約40万人（ブエノスアイレス市警察は発表 アルゼンチン連邦警察発表では約5万人）が参加して、雨の中で「沈黙の行進（marcha de Silencio）」と呼ばれるデモ行進がおこなわれた。その後、密約事件を巡っては、2つの下級審が捜査を認めるには十分な証拠がないとして捜査請求を棄却し、検察側は上告したものの、上級庁の担当裁判官が改めて証拠を検討し犯罪の要件を満たしていないと結論付けた。検察当局は、4月20日、捜査請求を取り下げた。

他方ニスマン氏の死亡事件を巡っては、捜査が続けられているが、6月2日のアルゼンチン各紙は、検察官の不審死に新たな展開が見られたことについて、一面で大々的に報じた。検察官のビビアナ・フェイン氏が1日、国内メディアに明らかにしたところによると、ニスマン氏の死亡から数時間後の午後8時過ぎに、ニスマン氏が使っていたサムスン製ノートパソコンに最大3つのフラッシュドライブが挿入された履歴が残っ

ていた。捜査官は、何者かがノートパソコンにその場でまたは遠隔でアクセスした可能性や、履歴に残った時刻が変更された可能性について調べている。ノートパソコンにはテロ事件にイランが関与した疑いをめぐりニスマン氏がまとめた捜査資料が含まれていた。

4. 経済情勢

INDECは、3月20日、2014年（暦年）のアルゼンチンの経済成長率（速報値）は、対前年比0,5%の伸び、2014年第4四半期は対前年同期比0,4%の伸びであったと発表した。2月の工業生産指数は前年同月比2,2%減、建設活動指数は同8,2%の増であった。

INDEC発表の3月の消費者物価指数は、前年同月比16,5%の上昇であった。他方、民間コンサルタント8社推計のインフレ率（首都圏のみ）は29,8%の上昇であった。

為替レートは、3月末前年同月比10,1%ペソ安の1ドル=8,8197ペソであった。6月2日現在、ペソ安がさらに進行し、公定レートで9,02ペソである。なお、非公式ブルーレートは、12,66ペソと言われる。

財政収支は、2月の基礎財政収支が135億ペソの赤字であった。また、2月の貿易収支は53百万ドルの黒字であった。

5. 日亜関係

(1) 日亜経済合同委員会の開催

昨年12月5日、ブエノスアイレスで日亜経済合同委員会が開催され、両国経済界から190名超の関係者が参加した。日本側からも約100名が参加し、最近では最高の出席であった。エネルギーや資源の開発等について活発な議論が行われた。アルゼンチン商業会議所のカルロス・ベカ会頭は、「両国経済は補完性が高い。経済強化の余地は十分にある。」と述べた。日本側代表の佐々木幹夫三菱商事相談役は、「アルゼンチンにはいくつかの障害があるが、資源や穀物が豊富で潜在力は高い。関係を深める時期にある」と述べた。

(2) アルゼンチンの輸入制限措置に関する

WTO報告書

WTOは、1月15日、日本、米、EUが申し立てていたアルゼンチンの輸入制限措置について、紛争処理上級委員会の報告書を公表した。この報告書では、日、米、EUの主張を全面的に認め、①アルゼンチンの事前輸入宣誓制度は、輸入を制限する措置であり、GATT第11条第1項に整合しない、②アルゼンチンの輸入均衡要求は、輸入を制限する組織的かつ将来にわたり適用

される措置であると認められ、GATT第11条第1項に整合しない、③アルゼンチンは、WTO協定に整合しないと認められた措置をWTO協定に整合的なものに是正するよう勧告するという内容であった。

(3) 日産自動車 小型トラック生産で亜国進出

4月、日産自動車は、資本提携先のルノーの工場敷地内に6億米ドルを投じて新型「NP300 フロンティア」



ピックアップトラックを生産するための設備を新設すると発表した。2018年生産開始、約1,000名の新規雇用が創出される。

(あらお やすいち：当協会前常務理事)

長い間「日亜政治経済短信」を掲載してまいりましたが、今回をもって最終回と致します。長らくのご愛読を感謝します。次回以降は、当協会の吉村佳人常務理事が引き続き掲載します。

荒尾 保一

Resumen en castellano

por Irene Gashu

Saludo del vicepresidente (p. 2)

Por Teruo Kijima

Me siento muy feliz de haberme desempeñado como director general de nuestra Asociación por once años. En mi nuevo cargo como vicepresidente, brindaré mi completo apoyo al nuevo director general para que nuestra Asociación continúe prosperando.

Saludo del nuevo director general (p. 2)

Por Shinya Nagai

De 2003 a 2008, fui embajador de Japón en Argentina. Las relaciones bilaterales entre Argentina y Japón no se podrían desarrollar si no existe una relación cara a cara entre los individuos. En este sentido, nuestra Asociación ha venido cumpliendo un rol importante. En mi cargo como director general quisiera agregar mi granito de arena.

Modernidad vs. posmodernidad (p. 3)

Por Felipe Gardella, Ministro de la Embajada Argentina

El individuo moderno sentía angustia preocupado por la realidad presente. Su identidad era sólida y duradera. El individuo posmoderno, en cambio, siente ansiedad

preocupado por lo que se avecina. Su identidad es móvil y reciclable. Su lema: “no sé lo que quiero pero lo quiero ya”. Lo que debemos hacer es rescatar al individuo, actuar positivamente, unir la política con la ética, para lograr una sociedad justa y un orden mundial seguro.

Recordando Argentina (p. 6)

Por Masahito Suzuki, ex Representante del Banco Japonés para la Cooperación Internacional en Argentina

Infraestructura: Argentina posee la red ferroviaria más extensa de Sudamérica. Por varias razones, los trabajos de mejora y expansión de vías no se han materializado. Cuando se resuelva el aspecto financiero, se estima que la recuperación será muy acelerada. Recursos Humanos: el nivel de los ingenieros argentinos es muy alto. Conclusión: la larga “tormenta” que duró 10 años habrá nutrido a Argentina para que dé buenos “frutos”.

El mundo del tango (p. 7)

Por Hiroshi Yamao, Campeón Mundial de Tango Salón 2009

Como profesional del baile de tango, bailo y enseño a bailar. En la milonga (salón), existe una sociedad

jerárquica. No es sólo una actividad física sino social. Es un juego de “elegir y ser elegido”. Los más populares están en la cima de esa jerarquía. Los demás se esfuerzan para alcanzar esa posición. Los profesores estamos para ayudar a lograr esa meta.

Elecciones en Argentina (p. 8)

Por Yasuichi Arao

1) El 25 de octubre se realizarán las elecciones presidenciales y el 24 de noviembre, la segunda vuelta.
2) La presidenta Cristina Fernández visitó China y Rusia.
3) La presidenta y el canciller fueron acusados de realizar pactos secretos con Irán. El fiscal Alberto Nisman fue

hallado muerto en circunstancias misteriosas. 4) En 2014, el crecimiento económico de Argentina fue del 0,5% en comparación con el año anterior. Al 31 de marzo, el dólar estadounidense estaba a 8,8197 pesos. 5) El 5 de diciembre se realizó en Buenos Aires, una reunión plenaria del Comité Mixto Empresario Argentino-Japonés. La apelación de Argentina fue rechazada por la OMC. El fallo expresa que las restricciones a la importación de mercancías violan el reglamento del comercio internacional. Nissan invertirá U\$S 600 millones en Argentina para producir la pick up NP 300 Frontier.



協会の活動案内

～ 10月16日 (金)

当協会主催

第28回「タンゴ音楽の集い」

毎回好評の当協会主催「タンゴ音楽の集い」の平成27年) 第3回目の開催予定は次の通りです。

テーマ：今年のテーマ「タンゴが訴えかけるもの

～その表現と変遷を楽しむ～」の第3回目

日 時：10月16日 (金) 18:30開催予定

場 所：これまで同様、新橋の当協会旧事務所隣の

第2光和ビル「シンバシ・フォーラム」

地下2階

～ 10月18日 (日)

アルゼンチンタンゴ・コンサート

日 時：10月18日 (日) 14:00～16:00 (開場13:00)

場 所：檜チャリティーコンサートホール (吉祥公園内、JR真鶴駅よりタクシーで5分)

主 催：アルゼンチンタンゴ実行委員会

企画・監修：

日本アルゼンチン協会/日本タンゴアカデミー/

日本アルゼンチンタンゴ連盟

協 賛：クレアーレ熱海ゆがわら工房/ (株) ぐるなび

後 援：湯河原町、真鶴町



協会の活動報告

～ 1月22日 (木)

茨城県境町、長田小学校関係者表敬

境町関係者並びに長田小学校長、PTA会長他と新年の表敬、懇談を実施した。

境町の本年テーマの1つ、「国際交流」に関し、意見交換を行った。

加藤、寺本、藤田、3理事が出席した。

～ 1月23日 (金)

デジャン大使に新年表敬

友国会長、木島理事長、荒尾・加藤・寺本常務理事がアルゼンチン大使館を訪問し、デジャン大使、ガラデラ公使に新年表敬すると共に懇談した。

～3月11日(水)

平成26年度第2回理事会

内幸町の米州開発銀行アジア事務所会議室において15:00から、平成27年度事業計画、平成27年度予算の審議、承認を主たる議案として、第2回理事会が開催された。

～3月20日(金)

第26回「タンゴ音楽の集い」開催

今年のテーマは「タンゴが訴えかけるもの～その表現と変遷を楽しむ～」で、その第1回目。当協会理事の飯塚久夫の名解説、名トークによる演奏、曲の映像は満場の参加者を堪能させた夕べとなった。

～5月26日(火)

アルゼンチン・ナショナル・デイ 記念レセプション

アルゼンチン・ナショナル・デイ(建国記念日)を祝うレセプションがデジャン駐日アルゼンチン大使主催で、19:00から約2時間に亘り、大使公邸で盛大に催された。各方面から多数の招待者が集まり、アルゼンチン料理とワインで記念日を祝した。

当協会から木島理事長をはじめとし、多数の役員が招待を受けて出席した。

～5月29日(金)

平成27年度第1回理事会/ 第3回定時総会/第2回理事会

平成27年度第1回理事会は、在日アルゼンチン大使館小講堂に於いて、午後3時から開催され、平成26年度事業報告並びに平成26年度収支決算報告が承認されると共に、第3回定時総会に上程する7議案が原案通り承認・可決された。

引き続き、午後4時から同場所に於いて、第3回定時総会が開催された。

冒頭、議事に入る前、友国会長より、この会場を提供して頂いたデジャン駐日アルゼンチン大使に対し深甚なる謝意が表明された。

高安常務理事から、現在の議決権総数101個に対し、出席正会員33名、委任状提出が38名、合わせて議決権を有する出席総数は71個で、過半数を上回っており総会は適法に成立している旨報告された。

第1回理事会で承認・可決された7議案が、それぞれの担当理事から説明があり、全ての議案が滞りなく承認・可決された。

本年度は理事・監事の改選期に当たり、再任を含めて28名の理事と2名の監事が選任された。

理事：荒尾保一 飯塚久夫 尾見和男 勝田富雄
加藤勝巳 加藤寛司 川上 貴 イレーネ賀集
木島輝夫 楠 宗久 斉木茂治 穴戸和郎
清水 章 嶋 利治 高安宏治 寺本安久
友國八郎 藤田伍郎 保坂庄司 松下 洋
的場博子 安田直弘 吉村佳人 渡部千秋
(以上24名は重任)

木村敏夫 永井慎也 松枝直樹 松本良彦
(以上4名は新任)：
以上理事28名

監事：西脇 修(重任) 横山 稔(重任)
以上監事2名

これら新役員の氏名は、登記完了次第、協会ホームページに掲載します。

尚、この総会を以って退任される理事の守戸 一清氏及び井尻 収一氏に対し、これまでの本協会へのご尽力に深謝する旨議長から申し添えあった。

第7号議案(顧問選任の件一報告事項)に関し、木島理事長から、以下の9名が任期2年間(平成29年5月31日まで)として顧問に選任された旨報告された。

顧問：河崎 勳 ダンコムジャパン代表取締役
(元NHK)(重任)

京谷 弘司 作曲家、バンドネオン奏者
(重任)

白鹿 敦己 元当協会役員、
元三井物産(株)役員(重任)

津島 勝二 元海上自衛官、(元在ブラジル日
本大使館書記官)(新任)

鶴岡 忠成 元当協会役員、
丸紅(株)理事(重任)

守戸 一清 元当協会役員、
元三井物産(株)役員(新任)

林屋 永吉 元スペイン大使(重任)

舩松 伸男 医師(重任)

星野 美智子 版画家、日本版画協会理事
(重任)

平成27年度第2回理事会

定時総会に引き続き、同総会で選任された理事により、第2回理事会が開催され、友國議長から役付理事並びに業務執行理事の選定案が示された。

満場一致で選定案は承認されて、次の通り平成27年度の執行部新体制がスタートした。

会長・代表理事
副会長・代表理事
理事長・代表理事
常務理事・業務執行理事
同
同
同
同
同
業務執行理事
同
同
同
同

友國 八郎
木島 輝夫
永井 慎也
加藤 勝巳
川上 貴
高安 宏治
寺本 安久
保坂 庄司
吉村 佳人
尾見 和男
木村 敏夫
楠 宗久
嶋 利治
藤田 伍郎
松本 良彦
渡部 千秋

日本のアルゼンチンタンゴ界の重鎮、バンドネオン奏者京谷 弘司氏（当協会の顧問）率いる四重奏団のタンゴ演奏が始まると、会場ムードは一挙に盛り上がり、楽しい懇親の場となった。100名を超える参加者は、アルゼンチンタンゴ演奏を聴きながら、またアルゼンチン料理とワインをエンジョイしながら懇親を深めていた。

更に、京谷バンド演奏の第1ステージの後のブレイクを借りて、参加者の前で、当協会の更なる両国文化交流促進の応援団長として、また当協会の顔として、日本アルゼンチン文化大使を任命するに相応しい人、安田 衣里嬢を紹介して、友國会長から日本アルゼンチン文化大使としての認証状が手渡された。（安田衣里嬢については、「トピックス」参照）

今後懇親会などで、皆様におかれましても安田文化大使と懇談して頂くことをおすすめします。

～5月29日（金）懇親会

第3回定時総会終了後18:00より、恒例の協会会員懇親レセプションが、デジャン大使のご厚意により大使公邸サロンで約2時間に亘り開催された。

ラウル・デジャン大使のスピーチ、友國會長の挨拶に引き続き、5月25日発令で在アルゼンチン日本特命全権大使となられた福寫 教輝（ふくしま のりてる）新大使の挨拶と乾杯のご発声で懇親会はスタートした。



～6月11日（木）在亜日本国大使館 新日本大使と昼食懇談会

在アルゼンチン日本国大使館特命全権大使 福寫 教輝氏に於かれましては、アルゼンチンご赴任を控えご多忙の中、昼食懇談会の時間を頂きました。

ご出席者：

外務省から；福寫新大使、大鶴中南米課長、西事務官
当協会から；友国会長、木島副会長、永井理事長、
他役員10名

6月11日（木）11:30～13:15、ホテル・モントレイ
赤坂「エスカール」にて楽しく懇談し、新任地アルゼ
ンチンへのご出発を送別した次第。

新大使は、スペイン語に精通されており、今後更なる
日亜交流が促進されるものと期待されます。

～6月19日（金）

第27回「タンゴ音楽の集い」

日本タンゴアカデミー会長、日本アルゼンチンタン
ゴ連盟会長で当協会理事でもある飯塚 久夫氏による
サウンド・映像と解説トークで毎回大好評を博してい
ます「タンゴ音楽の集い」です。今年のテーマ「タン
ゴが訴えかけるもの～その表現と変遷を楽しむ～」で、
今回はその第2回目。

6月19日（金）18:30から、いつもと同じ場所、JR
新橋駅前の当協会旧事務所隣、光和ビル「新橋フォー
ラム」地下2階大ホールに、今回も60名を超える参加
者が集まり、飯塚久夫氏のいつもながらの名解説・ト
ークに酔いしれながら、タンゴ黄金時代への道のりを記
録する1930～40年代の貴重な映像に感動する夕べで
あった。

タンゴが表現する「葛藤」と「郷愁」、ファン・ダ
リエンソが演奏する最初のトーキー映画（1933年）、
22歳のビルヒニア・ルーケが歌う「ミ・ノーチェ・ト
リステ」（1949）、この映画を見なければタンゴ・フ
アンにはなれないという代物の映像、ダリエンソとブ
グリエーセの演奏スタイルの比較からタンゴが訴える
「ユレ」と「タメ」の魅力等々、中身の濃いタンゴ音
楽の集いであった。

更に今回は、特別に当協会役員夫人が自ら手作りさ
れたエンパナーダの差し入れと併せ当協会よりアルゼ
ンチン・ワインを提供し、参加者に試飲して頂き、タ
ンゴ、エンパナーダ、ワインに浸った集まりであった。

トピックス

～当協会

日本アルゼンチン文化大使誕生

日本、アルゼンチン両
国の文化交流、人的交流
の促進と国際交流に向け
ての協会活動の新規分野
を立ち上げてゆくことは、
当協会の活動方針の一つ
であります。

5月29日（金）当協会
懇親会の席上で、会員の
安田衣里嬢を日本アルゼ
ンチン文化大使に任命し、
友国会長から同嬢宛て認証状を手渡された。

友国会長から、「安田さんはこれまでアルゼンチン文
化に高い関心を寄せられアルゼンチンの魅力を広く内
外にアピールしてこられた。これからも良き応援団と
してアルゼンチン文化の発展にお力添えを頂きたい」
旨述べられた。

安田 衣里嬢は、平成26年度ミスワールド日本代表
コンテストで準ミスを受賞、幅広く国際交流、ボラン
ティア活動に携わっており、また当協会法人会員（株）
安田の安田社長の仕事にも関与し、アルゼンチンに滞
在し日本食文化の紹介等アルゼンチンの人々との交流
もあり、文化大使にふさわしい方であり、当協会の顔
として活躍して頂きたいと思っています。



文化大使認証式

会員の皆様からの自由なご意見、情報、原稿投稿をお待ちしています

「アルヘンティナ」に会員からの自由な「会員投稿欄」を設けて、会員交流を図って行きたいと思います。

お住いの市町村名、年齢、お名前（ペンネームでもOK）記載してご投稿ください。お待ちしております。

投稿先：日本アルゼンチン協会 FAX: 03-6809-3682 E-mail: nippon@argentina.jp



協会ホームページの活用及び E-メール通信の件

1. ホームページ (URL: <http://www.argentina.jp>)

何らパスワードの入力は不要で、誰でも自由にホームページ内情報にアクセス出来ますので、ご活用ください。

2. E-mail アドレス

nippon@argentina.jpが、協会のE-mailアドレスです。

アルゼンチンに関わる興味ある情報やイベント案内を出来るだけタイムリーに会員の皆様にお伝えする為、E-mailアドレスを連絡頂いている会員の方にはメール通信を始めております。

このメール通信をまだ受信されていない方で、受信をご希望の方は、住所、氏名及びメール・アドレスを当協会メールアドレス宛 (nippon@argentina.jp) 発信、ご連絡下さい。次のメール通信から送信致します。

ご連絡頂きましたメール・アドレスは、当協会の情報伝達関係以外の用途には使用致しません。

ご質問その他お問い合わせある場合は、協会事務所宛お電話ください。

電話：03-6809-3681 担当；阿部

平成27年度 年会費納入のお願い

本年度（平成27年4月1日～平成28年3月31日迄）の年会費のお支払いがまだお済みでない方は、早めにお支払手続きを済まして頂きますようお願い申し上げます。

個人正会員：1万円

個人賛助会員：5千円

住所変更届けのお願い

ご住所が変わりました際は、早めに新住所を協会事務所にご連絡ください。

電話：03-6809-3681

FAX: 03-6809-3682

E-mail: nippon@argentina.jp

本会報のデザイン、記事の無断転用はお断りします。

編集長よりの御礼

フロント・ページの写真は、水上前駐亜日本大使からご提供頂きましたフォトです。

執筆、原稿に当たっては、フェリペ・A・ガルデラ公使、鈴木将仁様、山尾洋史様にご協力頂きました。

スペイン語のサマリー (Resumen en castellano) は、イレーネ賀集さん（当協会理事）に作成して頂きました。

この場をおかりしまして、皆様のご協力に対し、厚く御礼申し上げます。

日本アルゼンチン協会会報 第66号 2015年7月9日発行

発行人 永井 慎也（当協会理事長）

編集長 加藤 勝巳（当協会常務理事）

編集発行 一般社団法人 日本アルゼンチン協会
〒108-0073

東京都港区三田 2-7-16 協和三田ビル 3階

電話：03-6809-3681

FAX：03-6809-3682

E-mail：nippon@argentina.jp

URL：http://www.argentina.jp

印刷 株式会社 アイデア・インスティテュート